

IOT活用 林業効率化 信大など 山ノ内で機械実演

信州大(本部・松本市)や県、航空測量会社などでつくる研究チームは10日、林業経営の効率化を目指し、下高井郡山ノ内町のカラマツ林で現地検討会を開いた。小型無人機ドローンや航空機によるレーザー計測で事前に選り出した木を、高性能な林業用機械が長さや体積を計測しながら伐採する様子を実演。地元

の森林組合の他、製材業者や県職員を含む林業関係者約60人が見学した。

高性能林業用機械は、あらゆる機器がインターネットにつながる「モノのインターネット(M2M)」の技術を活用。伐採する木の長さや直径を計測した上で、インターネット上に膨大なデータを保管する「クラウド」にデータを

送信する。研究チームは、森林組合や製材業者、工務店がこうした情報を共有し、林業経営全体の効率が高まることを狙っている。

この日の実演では、高性能林業用機械の操縦者が手元のタブレット端末の案内で、事前に選ばれた伐採木を特定。機械からリアルタイムで送られてくる木の直径などの情報

を、参加者がパソコン画面で見守った。参加者の1人は「作業も情報のスピードも速い」と感心していた。

研究チームに参加する北信



州森林組合(中野市)の堀沢正彦業務課長は「情報の共有により、生産者も利用する側も在庫や時間のロスが大幅に減らせる」と話し、国産材の安定供給につながることを期待。研究チームを統括する同大農学部に加藤正人教授(森林計測学)は「この技術で、森林の木を立った状態のまま在庫にするのと同じ効果が得られる」と説明した。

現地検討会で伐採を実演する高性能林業用機械。10日、下高井郡山ノ内町